

（急性淫魔症候群の治し方 前日譚）

※前日譚では作品の内容に関するネタバレは一切しておりません。本編視聴前でも視聴後でも安心して読みいただくことができます。

※ヒロインに関する描写がございます。苦手な方は閲覧をお控えくださいませ。

早朝。朝日が昇りきる前に私は起床し、身支度を整える。

宿内では私が一番早起きだったようで、自分の動く音がやけに響いていた。

Yシャツのボタンを一番上まで留め、育ての親から受け継いだタイを首に付け、着古したコートに袖を通す。いつもの動作だ。

「さて、今日は西の方角を目指すか」

自分以外誰もいない部屋で独りごち、机の上に地図を広げ羽ペンで書き込みをしていく。

「昨日の内に宿近辺の見回りをしたが特に問題は無かったし、もう少し足を伸ばしてみよう。こっちの方はモンスターの出現も頻繁だと聞くと、丁度いいだろう」

声に出しながら計画を立てるとなんとなく上手くいく気がする。誰かに聞かれているわけ

でもないので恥じることはないが、あまり他人に見られたくはないところだ。

計画を立てたところで身支度の続きをする。

薬品が入った瓶、病氣や怪我の治療について書かれている本、非常食用のパン二つ、着替えをリュックに詰める。すると、使い慣れている武器：鞭の紐部分がほつれていることに気が付いた。

「この前の戦闘で大分ダメージを負ってしまったか……。手入れは怠らない方がいいな、今度どこかの工房で修理してもらおうことにしよう」

この鞭はその辺に売っているようなただの鞭と違い、魔力が充填されている特注品だ。普通の鞭より耐久性があり、モンスターへのダメージも大きい。

しかし、いくら魔力がこもっている武器でも傷む時は傷むし、一度傷んでしまった物はどうしても壊れやすい。自分で直すことができればいいのだが、限られた人間にしか修理できない。修理してもらえる工房を見つけるまで今はこのまま使うかなさそうだ。私は一つため息をつき、鞭を腰にセットをする。

リュックを背負い部屋を出る。：念の為、財布の中身を見る。小銭しか無いものの、今回の宿代くらいは恐らく払えるはずだ。

（仕方の無いことだが、あまり贅沢はできないな）

無事料金も足り、チェックアウトを済ますことができたので宿から出た。その瞬間。

「おーい！」

自分を見るなり駆け寄ってくる小さな影が一つ。

「あんた医師団の人！？」

自分の半分程度の背丈しかない男児が満面の笑みを浮かべながら走ってきた。着ている服は穴だらけで繕われた形跡もなくボロボロ、肌はくすんで汚れていて髪は脂っぽくベタついている。恐らく何日も風呂に入っていないのだろう。体は骨と皮といった具合で肉は一切付いておらず、服を剥いたらきっと肋骨が浮いているのだろうと容易に想像がつく。一目見ただけで分かった。貧困街に住む子供だ。

「何か用かな」

私は男児に目線をやり返事をする。男児の顔が若干強ばった。いつものことだ。

「情は人一倍も二倍もあるのにお前は愛想が悪いし人相が悪い」と言われたことがあるくらいには、自分の顔は怖い顔らしい。子供に大不評な顔なのだ。

しかしこの男児は臆することなく二の句を継いだ。

「何か食べ物持っていない？腹が減っててさ。あ、医師団なら金持ってるんだろ？金でもいい

から、な！頼むよ！」

初対面の相手、しかも年齢が一回りも二回りも下の人間にこのような態度を取られたら普通の人間は機嫌を悪くすることだろう。

「悪いが金が必要な分以外持っていないんだ」

私はリュックを下ろし、荷物を漁る。

「ほら、これで我慢しなさい」

男児にパンを一つ渡す。非常食用の物だがまあいいだろう。

「わーい！ありがとう！」

男児は満足したようで、私の返事を待たずにパンを持ってどこかへと駆けていった。

私は医師団に所属しており、旅をする傍ら身寄りも金もない子供、大人に無償で医療を施したり、食糧を分け与えたりしている。

先程の男児は勘違いしていたが、医師団は金を稼ぐようなことを一切していない、言わば慈善団体なのだ。医師団といっても今はわけあって自分は個別行動をしているが。

勿論、慈善事業をしているだけでは到底生きてはいけないため、モンスターが出現する地域に赴いてはモンスター退治で生活費を稼いでいる。そういう場所に限って貧困街が多く

あるのだ。それも当然のことで、モンスターが出現する場所というのは人が寄り付かない上資源や作物も全てモンスターに取られてしまう。街に僅かながらにいる腕に自身のある剣士や魔術師によって人間が住める程度にモンスターが退治されていることもあれど、それでも経済的に困窮が続き食糧難に至っているというわけだ。

思わず、育ての親から授かったループタイのトップを握りしめる。

「おじいさま」

血の繋がらない育ての親のことを、自分はずっとそう呼んでいた。

スラム街出身、実の親、兄弟の顔を知らない自分としては、先程の男児をみすみす放っておくことはできないのだ。

*

物心ついた時から自分には親も兄弟もそばにいなかったし、肉親の顔も名前も、自分の名前すらも知らなかった。

スラム街で過ごしていた頃、自分は恐らく十にも満たない歳だったが、年齢に関係なく食うか食われるかの生活を送っていた。

衣服は毎日同じもの。食糧はいつもゴミ捨て場から。住処は雨風凌げればどこでもいい。ただ毎日を過ごし、生きていくことですら困難だった。

同じ境遇にあった子供は自分以外にもいて、手を取り合って協力して生きていたのだが：気が付いた時には自分以外一人も居なくなっていた。

当時は、「良い大人に拾われたのだろう」とばかり思っていたが、今思えばあの年頃の子供ならば臓器を売るなり、売春させるなりされていても：いや、今更考えても仕方の無いことだ。気が滅入るだけなのだから。

可愛げもなく、目つきも悪い、しかも学はないくせに弁が立つ自分には悪い大人ですら殆ど寄り付かなかった。それはある意味、救われていたことのひとつだ。

「身寄りの無い少女を悪い男が拾って飼う」ということも日常茶飯事だった世界だ。男の自分にも似たようなことはあった。言うまでもなく拾うのは女だったが。

「あなた身寄りが無いのね、可哀想」「ご飯、禄に食べていないでしょう、骨が浮いてるじゃない」と売春婦からお情けを貰い、衣食住を確保してもらったことも短い期間ながらあった。

その一方で性行為の真似事のようなことをさせられ、自分の生き死にの左右より嫌悪感が勝り、思い切り売春婦を突き飛ばしたらカンカンに怒られて追い出されたこともあった。

（気持ち悪い！）

こんな世界でなんて貞操の一つや二つ、ドブに捨てるようなものだ。快樂を得られて、与えて、誰かに生かしてもらえらるならそれでいいと思う人間は多いのだろう。当然だ、それくらいしかまともに生きていける選択肢が無いのだから。

しかし、それでも自分は選ぶことができなかったのだ。

そんなことがあってから、大人の女は信用できなくなった。

毎日着替えられるだけの服を与えてくれる人も、暖かいご飯を決まった時間に食べさせてくれる人も、雨風凌げる家を用意してくれる人も、いない。一人で生きていくしかなかった。自分の力だけで生き、何日、何週間、何ヶ月が経過したのだろうか。

とある日。連日の長雨の影響か、ゴミ捨て場には食いかけの物どころかゴミひとつ捨てら

れることがなかった。

普段から多く物を口にしていないこともあり、何日も食べない状況は相当に酷だった。それに加えて豪雨。体から遠慮なく体温を奪っていく、精神や気力すらも削り取っていく。風も強く、屋根のある場所にも移動しても無意味だった。それが数日も続いた。極度の空腹、寒さで意識は朦朧としていた。

歩き回って食糧を探すのも、安心して眠れる場所を探すのももう諦めた。

自分の死場はここだ、と思って、自分の食堂でもあるゴミ捨て場に体を投げ捨てた。

ゴミが一つも無いゴミ捨て場はただのコンクリートの囲いだ。固い。冷たい。そこに優しさの欠片なんて一つも無い。

何もかも、自分の人生も、体も、全てここに捨てた。

遠くから馬車が走る音が聞こえてくる。きつと、天使か悪魔か……はたまた死神が自分のことを迎えに来たのだろうか、そう思っていた。

「ああ、大丈夫か、君」

スラム街には似合わない、品のいい声が雨音と共に響く。

馬車から降りた人間は小柄で細身の男だった。四十歳程度の若くはない……けれど、見るか

らに金に困ってはいなさそうな身なりで、首にはシンプルながら宝飾品も付けている。どう考えてもスラム街の人間ではない。きつと、ずっと、遠くから来た人だ。そう直感した。（何でこんなところに、こんな人が）

男は悲しそうな顔をして私を見てくるだけだ。

焦れなくなったのか、はたまた助けてほしかったからなのか、今では分からない。

「何」

最後の力を振り絞って、一言、そう口に出した。

散々バカにして、突き飛ばして、自分は一人で生きていくと思った癖に。

「君さえよかったら、僕の家に来るかい」

私は瞼を閉じて、小さくうなずいた。男は私の反応を見るや否や大急ぎで抱きかかえて馬車に乗せた。

馬車の中には女（後に男の姉だと判明した）も乗っており、その女も心配そうな目で私を見てきたことは覚えているが、身体が限界の状態で馬車に乗った後のことはよく覚えていない。

気が付いた時には今までに使ったことのない上質なベッドで寝かされていた。慌てて飛び

起きると。

「あ、起きたかな。おはよう」

男がベッドの横に置かれている椅子に座っていた。

きつと自分が目を覚ますまで付きっきりでそばにいたのだろう、目の下にクマができていて、でも疲労を見せることなく自分に微笑みかけてきた。

その屈託のない笑みが怖く、何か裏があるのではないのかと疑ってかかっていた。

それこそ、自分を拾った男は男色の気がある人間なのだと、尻の一つや二つ取られても文句は言えないのだと覚悟していたが、全くそんなことはなく。

「君が住んでいたところの近くにはね、宝石の採掘場があったんだ」

自分はあからさまに男を警戒していたのだろう。男は自分の警戒を解くように説明をし始めた。

自分達姉弟は宝石商であるということ。姉は宝石の採掘を、弟の自分は宝石の加工をし生業にしているということ。

採掘場を訪れた帰りに自分が倒れていたところを見つけたので心配になって拾って帰ってきたということ。

特に見返りや何かを求めることはしないということ。

そして、自分が望むのであれば元の場所に帰しても良いということ。

私は何一つ拒むことはしなかった。

程なくして男の養子として迎え入れてもらい、新しく名前も付けてもらった。

「あなたのことは、何て呼べばいい、…ですか」

たどたどしい敬語を使いながら男に聞いた。名前は知ってはいたものの、何故かどうしても呼べずにいたのだ。

「父…さん…?」

養子、つまり自分は子供で、親であるこの男は父親なわけだ。そう呼ぶのが妥当なのだろうと思って、そう口にした。

「君にはきつと本物の父親がいるわけだ。だから父さんなんて呼ばないでほしいし、思わないでほしい」

「そうだな、おじさんとかおじいさんとか呼ぶのはどうだろうか」

おじさんと呼ぶのはよそよそしいし、男をおじいさんと呼ぶには相応しくはない年齢だ。

「何、君が大人になる頃には僕はおじいさんになっちゃうから」

と言い負かされ、その日から「おじいさま」と呼ぶこととなった。

：おじいさまの姉からは不評だったが。

「それじゃあ私はおばあさんになっちゃうじゃない！」

そう言われたのでおじいさまの姉のことは今でも名前で呼んでいる。

それこそ、最初の数ヶ月はおじいさまの姉のことを毛嫌いしていた。自分の過去のことがあるから無理もないのだが。

本人に言ったら大層傷つくと思うので口にはしなかったものの、おじいさまの姉はかなり顔も体型も良く、いかがわしいお店に出たら一番人気になりそうなくらいの美貌の持ち主だった。

今まで自分を性的な目で見てきたり手を出してきたりした人間がそういうタイプの女ばかりだったので心が勝手に拒絶してしまっていたのだが、おじいさま以上にこの人はお人好しで。

「ヴァルベル、はいあーん。好き嫌いしちゃだめよ、あなたガリガリなんだからちゃんと食べなきゃ」

「ヴァルベル、お着替え手伝ってあげるわね！両手を上にしてちょうだい」

「ヴァルベル、髪を梳かしてあげるわ。あなたは本当に髪の良いわねえ」

と、自分のやることなすことを手伝われ、挙句の果てにおじいさまに苦言を呈されていた程だった。

ここまで他人に無償で見返りもなく尽くす人を見たことがなかったので驚いたものだ。

「養子にした以上、甘やかしっぱなしは禁止だ」

とおじいさまは姉に忠告し、私に学校を通わせたり、勉強を教えてくれたり、モンスターとの戦い方を教えてくれたり：と自分の身に余る程良くしてくれた。

おじいさまとおじいさまの姉の甲斐もあり、：自分の努力も実ったのか、学校では好成績を残し成績優秀者の中でも特に優秀な人間にしか入団できない医師団の一員になることができたのだ。

勿論、成績が良かったから医師団になったわけではない。

自分の幼少期のように悲惨な生活を強いられている人間が、この世界に一人でも減るよう
に。

自分が過去のおじいさまのようになれるように。

そう願いと祈りを込めて医師団を目指したのだ。

*

「…もうあれから二十年程経過しているんだな」

私は過去のことを振り返りながら路地を見て回っていた。こういう場所にも案外モンスターが居て、攻撃の術を持たない人間に害を与えているのだ。幸いなことに、モンスターの気配も物音一つも無かった。

「もう少し奥に行ってみることにしよう」

人通りの少ない路地をどんどん進む。廃墟と化している家が連なっているところを見るに、ここにはモンスターが多くいそうだ。

予想は当たり、モンスター化してしまった動物が数体出てきた。私は手慣れた動作で鞭を使いモンスターを退治する。

そう手強くはなく呆気なく散っていったが普通の人間が生身で退治するには骨が折れるのだろう。

ポケットに入れていたナイフを取り出し、倒れたモンスターから毛皮と牙を取る。売っても然程高い値は付かないだろうが、一日の食費くらいにはなりそうだった。

（こんなところか）

素材の処理を済ませ立ち上がると一瞬、何か視界の外で動く気配がした。反射的に鞭を握る力が強くなる。

辺りを見回すと、ゴミ捨て場に置かれたゴミの上に何か動くものを発見した。

餌を探している動物か、はたまたモンスターの生き残りか、と思ったがよく目を凝らしてみるとそれは人間で。

自分の過去と重なり、心拍数が急激に上がる。

「おい、大丈夫か！」

慌てて声をかける。私の声かけに反応したのか、少女は片足をびくっと動かしした。

服装からしてこの地域の人間：貧困街に住んでいる子供というわけではなさそうだし、背負っているリュックの大きさから私と同じく転々と旅をしているように見える。

マメに手入れをされていないであろう長髪はボサボサで初めは性別の区別が付かなかったが、腕と脚の筋肉の付き方からして少女であることは間違いないさそうだった。

少女が顔を上げる。想像していたよりも整った顔立ちで芯の強そうな目をしていた。

が。

「臭い」

思わず鼻をつまんでしまう。とてつもない悪臭が少女から漂っていた。

ここがゴミ捨て場だということもあるのだろうが、何日……いや何ヶ月風呂に入っていないんだ……と考えてしまう程に体は服も肌も汚れていた。

「君、いいからこっちへ来なさい!」

腕を強引に掴んで少女を引っ張る。引っ張った途端、ゴミ捨て場のゴミ山が多少崩れたが今はそんなことを気にしている場合じゃない。

リュックに入れていた最後の非常食のパンを取り出し、少女の口に突っ込む。少女はそれに目を輝かせて瞬く間にたிரけた。

パンを一つ食べたものの体力は尽きているようで、自分から動く気配は無い。見かねた私は少女を腕に抱えて運ぶ。少女は多少慌てて照れたもののすぐに体を私に委ねた。

私は元々目を付けていた宿に向かい、宿の店員に事情を説明してチェックインをする。自分で言うのもなんだが、どこからどう見ても拉致にしか見えない。

こういう時医師団の人間だと分かる格好をしているのは得だ。それだけ医師団は絶対の信頼を置かれているのだ。

…まあもしかしたら、少女の臭いに耐えかねたのかもしれないが。

部屋に着き荷物と少女を下ろし、私は浴槽にお湯を張る。

「あともう少しで風呂に入れるから、支度が終わったらとりあえず入ってきなさい。そんな格好でそんな臭いじゃどこにも行けないだろう」

少女はもじもじしながら立ち尽くしている。口がきけないというわけでもなさそうなのだが、何を言うわけでもなく服の裾を握ったり離したりしては、眉をひそめたり顔を赤らめたりしている。

「なんだ、金に關しては気にするな。…ん、そうじゃない？」

少女はすかさず首を横に振った。

「もしかして」

顔を赤らめていることから察するに。

「宿の礼にお前の体を要求するとも思ったのか…？」

そう言った瞬間、私の言葉を強く肯定するためなのか少女は何度も頷いた。

「わっ、私は医師団に所属しているれっきとした医師だ！ほら見ろ、この腕章！言っておくが非公式の物じゃないぞ！」

左腕についている腕章を指で引っ張り、これでもかというくらいに見せつける。

世界的に活動している医師団というだけありこの腕章は有名な物だ。

これで大概の人間は理解してくれるが、この子は理解が及ばなかったようだ。

この腕章を授けられるには何度も厳しい試験をくぐり抜けなければいけない上、高度な医療知識、見返りを求めない奉仕の精神を持っている人間である必要があるのだ。

そう易々と手に入れられる代物ではない。

「どこの宿でもこの腕章を見せると安価で泊まらせてくれたりするものだからすっかりこれを信用しきっていたが……知らない奴は知らない、か……」

世界的に活動しているとはいっても医師団の数はそう多くはない。それもそのはずだ。目指す者が少なければ、目指したところで医師団の一員になるためのハードルはとても高いのだ。

「さ、先に言うておくが、やましいことは決してしない。私は男である以前に医師だ。女子供に手を出すのは治療を施す時だけだと決めている」

その言葉に安心したのか、少女は脱衣所に入って行った。まあ、しっかりと鍵をかけてはいたが……。

少女が風呂に入っている間、何をしようにもそわそわとしてしまつて何も手に付かなかつたので、近所のベーカリーに行きパンをいくつか買った。

あの少女には栄養が足りていないようだから、とついでに牛乳も買う。

部屋に戻るとあの少女は椅子にちょこんと座っていた。

髪の毛のツヤを取り戻し、土埃に塗れていた体もすっかり跡形も無く、丁寧に洗つたようだった。悪臭もなく一安心だ。

少女が今まで着ていた衣服は丁寧に畳まれて床に置かれていた。その代わりか、備え付けられていた大人用のバスローブを着ていたが、少女の背丈に合つておらず袖がぶかぶかになつてゐる。

「後で宿屋の人に行つて服を洗つてもらふとしよう。他に洗うものがあつたら出しておきなさい」

そう言うとき少女はリュックから衣服を何着も取り出し、床に積み上げていった。着ていた服と同様どれも汚れていて、最早洗うより新しいものを買つた方がいいのではと思ふものばかりだった。しかし新たに服を買う余裕がないのは自分も同じため強くは言えなかつた。

（悪臭で気が付かなかつたが…）

この少女、膨大な魔力を秘めている。

何故あれだけボロボロになりながらもモンスターに殺されることなく、人ざらいに遭うことなく生きていられたのかようやく理解できた。

無意識なのか意識的にしているのかは分からないが、恐らく気配遮断の術を持っているのだろう。

少し鍛えれば、肉体に魔力を流し物理的な攻撃に特化した優秀な前衛になることは間違いないなさそうだ。

：ただこれだけの膨大な魔力を持っているということとは、それに比例してエネルギー消費も激しいのだろう。

パンと牛乳を少女の前に置く。

「食べてもいい」

少女はまた瞳を輝かせながらパンをもぐもぐと食べ始める。他の年頃の少女と比べてやけに食べっぷりがいいのはそういうことなのだろうか。

あまりにも美味しそうに食べるものだから自分も一つ口にしてみたのだが、至って普通の惣菜パンだった。

なんというか、正直認めたくはないことだが……少しばかり惹かれてしまったところがあるのだろう。

「お前、一人で旅をしているのだろうか？」

問いかける。理由は分からないが旅をしていることは当たりらしく、少女はパンを口いっぱい頬張ったまま大きく頷く。

「丁度前衛が欲しかったところなんだ」

自分の現在の状況を手短に説明する。少しでも自分の生い立ちにも触れつつ。少女は哀れみはしなかったものの少し驚いたようで、その時ばかりは食べる手を止めていた。が、すぐに咀嚼は再開された。

「私は……その……魔力自体は少なく、攻撃に特化はしていないんだ。どちらかというとサポートに回る役目なんだが、わけあって一人で行動しててな」

「モンスターを退治するにしても、一定の強さを超えてしまうとどうしても退治ができなくて困っていたところなんだ」

これは本当のことだ。強いモンスターがいる地域ほど貧困は進んでいく一方なのだ。それに、強いモンスターは比例して良い素材を得ることができ、高値が付く。

倒すにしても自分一人では限界があったのだ。

「もし良かったら私の旅のパートナーになって、前衛を務めてはくれないだろうか」
見捨ててはおけない。そう直感で思ってしまったのだ。

見捨てたら、きつと次は。そんな気がしたのだ。ゴミ捨て場に寝ているような人間だ。モンスターでなくても悪い人間に捕まえられる危険性は大きいにある。

私の気持ちとは裏腹に、少女は渋い顔をしていた。無理もない。会ったばかりの人間に心を開くことができる人間はそう多くはない。
しかし。

「お前の食べる物と住むところくらいは見繕ってやることができるだろう」
パンをむしゃむしゃと食べながら目の前の人間は片手の人差し指と親指で丸印を作る。○×
ということだろう。

それでいいのだろうか、とも思わなくもないが、人一人の命を救えることができたのだから良いことにしよう。

*

時刻は深夜。人っ子一人いない森の中、私達はモンスター退治に励んでいた。

「お前！前に出すぎだ！下がれ！」

怪しげな笑みを浮かべたサキュバスは私のパートナーに襲いかかろうとしていた。

私は叫んで忠告をするも、少女は一步も引かず、そのまま突き進み、足を止めること無く自分にのしかかろうとするサキュバスのみぞおちを勢いよく拳で殴りつける。

魔力が多分に使われたのだろう。一撃を放った瞬間に魔力がスパークし、辺りが一瞬明るくなる。まるで花火だ。

「うわあ……」

可哀想。そう言いかけて止めた。自分達を攻撃してくるモンスターに慈悲をかける情など持っているだけ無駄だからだ。

だが、見ていてこちらのみぞおちまで痛くなってしまうような程の威力は見て分かった。サキュバスは胃から白い液体を吐き出しながら（恐らく男のアレだろう）散っていった。

自分の見込み通り、少女は前衛として大変優秀だった。私がいま前に出て戦えないことを知っているからか、後先考えずに前に出て戦うのが玉に瑕だが。

自分一人では倒せなかった敵を倒せるようになったから良かったといえ良かった……が。

「素材として拝借するにしても、人型のモンスターをナイフで切り刻むのは未だに抵抗があ

るな……」

角は壊れてしまわないよう丁寧折り、羽根、尻尾はよく研いだナイフ切り取った。丁寧に袋に梱包をした後リュックに詰めた。

私が素材を収集している間、パートナーは魔力消費を補うべくパンをムシヤムシヤと食べていた。見慣れた光景なのだが、なんだか気が抜ける。

少女のおかげで高い素材を得られるようになったものの、魔力消費を補うために食糧をガンガン消費していき、それに加えて宿代も一人分余計にかかってしまうので金銭としては差し引きゼロに近い。

一向にお金は貯まることがない。最低限度の生活は続いていた。だが、一人で旅をしていた時よりもずっと楽しく生きているのはわざわざ言うまでもないだろう。

少女がもう一つ、とパンに手を伸ばした時私は気付いた。

「お前、手がボロボロじゃないか」

少女の利き手である右手が擦り傷だらけになっていた。

ケースバイケースではあるが、魔力を使って拳で攻撃するとなるとガントレットを付けながら戦うよりかは素手で魔力を直接叩き込んだ方がダメージが大きい。

ダメージが大きい分、自分の体に返ってくる衝撃も大きく手に傷を作ってしまうこともしばしばある。

少女には「薄手でもいいから手袋を付けて戦え」と口を酸っぱくして言っているのだが、聞いちゃいないのだ。

「治療をするから手を貸しなさい」

こんなこともあろうかと調査していた軟膏を少女の右手に塗る。

「無茶はするんじゃない」

これでもかと大きくため息をついてたしなめるものの、どこ吹く風と少女は遠くの月を眺めている。

親の心子知らず、とはよく言ったものだ。こちらがどんなに心配してやっても通じず、向こうは勝手な振る舞いをするのだ。

私は包帯を少女の手に巻いてやりながらため息混じりにこう呟いたのだった。

「…これは一度痛い目に遭わないと分かなそうだな」